

仲間とともに

神島雅樹君は三歳のときに進行性筋ジストロフィー症（※）という病気にかかり、中学校入学以来車イスを使って生活をしてきました。彼は義務教育の九年間を地元の小学校・中学校で学びました。中学校三年生の春には関西方面への修学旅行にも参加しました。

同じクラスの大村君は、雅樹君といっしょに修学旅行に行くことについて次のように書きました。

修学旅行の三週間ほど前に、僕と塩島と坂谷内は先生に呼ばれた。内容は旅行に雅樹君を連れて行くかということだった。僕は三年間の中で一番楽しいし、連れていったほうがいいと思った。他の二人も僕と同じ考えだった。

・・・そして、修学旅行の一週間ほど前に班を決め、僕の班に雅樹君が来た。僕の友達の中には「ひで

えじい、たいへんやなあ」という人がいたが、みんなと違うことができるわいと思って気にもとめなかった。

そして、彼らは障害者用観光マップを参考にして、見事に自主プランを完成させ、着替えのこと、トイレのことなどにについても相談していきました。

雅樹君にとっては初めての親の付き添いのない旅行でしたが、クラスの仲間に支えられながら、中学時代の大きな思い出を作ることができました。

次の作文は雅樹君が修学旅行の後で書いたものです。

※進行性筋ジストロフィー症……筋肉の萎縮と脱力が徐々に進行し、歩行や運動が困難となる疾病。

修学旅行に参加して

神島雅樹

この四月に、みんなといっしょに、僕も車イスに乗って修学旅行に行きました。友だちに車イスを押してもらったり、押して行けない所はおぶってもらったり、いろんなことを手伝ってもらいながら行ってきました。

行く前は、列車の中でのトイレのこととか、心配なことがあったので、ほんとうは行きたかったけれど、無理だと自分であきらめていました。

四月に入ってから先生が「みんなといっしょに修学旅行に行こう。」と言ってくれたので、行けるかもしれないなと思いました。

行きの列車の中はいつものクラスよりにぎやかで楽しそうでした。ぼくはいつもより楽しく遊べて疲れも感じませんでした。

京都駅についたとき、みんなは階段で行き、ぼくは班の

人とホームのはしのほうにあるエレベーターを使って行きました。エレベーターが遠くにあつて大変でした。だけど、エレベーターのある駅はまだましで、東金沢駅は小さくて階段しかなかったので、友だちにおぶってもらって行きました。

二日目に行った奈良のドリームランドでは、先生から「乗り物に乗るのは無理だから、ここで待ってよう」と言われましたが、こっそりと友だちといっしょに乗りました。友だちが「何に乗りたい？」と聞いたので、ぼくは「乗れるのがあつたらな」と言うと、友だちはぼくが乗れる乗り物を見つけてくれました。乗ったのはゴーカートとゴンドラでした。ゴンドラは空中を動いていくので、高所恐怖症のぼくはこわかったです。しかし、遊園地の乗り物に乗るのは六年ぶりくらいだったので、とても楽しかったです。

京都での自主プランでもみんなといっしょにいろんなところを回りました。中でも金閣寺がきれいで、強く印象に残りました。清水焼の絵付けもうまくできたので、焼き上

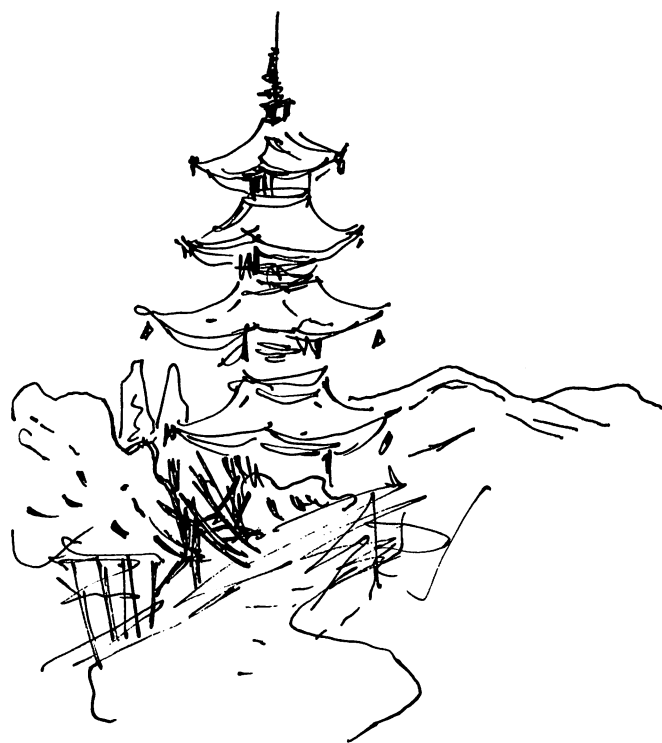
がりが楽しみです。

京都の町を歩いていて感じたことがあります。金沢では、時々ぼくをじろじろと見る人がいて、ひどいときには何回も何回もふり向いて見て行きます。もっとひどいときにはふり向きながら笑う人までいます。しかし、京都では、ぼくのほうをめずらしそうにじろじろと見る人があまりいませんでした。それどころか、国宝のお寺や二条城でさえ車イスで直接あがれるようになっていたのにはびっくりしました。

ぼくは初め、この修学旅行には行かないつもりでした。しかし、実際に行ってみて、いろんなことを学ぶことができてとてもよかったと思っています。

ただ、ぼくの場合、手伝ってくれる友だちがいなかったら、修学旅行には行けなかったと思います。やっぱりみんなの協力で行かれたので、うれしかったです。

知らない人になのんでも手伝ってもらえるような社会になつたらいいなと思います。



仲間とともに（中学校向け）

A 教材設定の意図

一般に「障害」を持つことは、マイナスととらえられることが多く、そういう中で障害を持つ者は「自分はみんなに迷惑をかけている」と思われ、周りの人間は「自分としてはやっつけてあげている」と、障害者に対する優位を意識するようになる。その結果、健全者と障害者の間には「優—劣」「強—弱」「上—下」の関係が固定化されることが多い。

しかし本教材では、健全者と障害者がそのような関係を超えて、ともに修学旅行を楽しんでいる。自分と一緒にいる人間とともに、楽しさを味わうのは当たり前のことだと考えている。健全者と障害者のこのように豊かな関係は、一緒に生活をし、辛さや喜びを共有する中で生まれてくるものである。

学級とは様々な個性の集まりである。その様々な個性を持つ一人ひとりが互いに支え合い、そのことが当たり前になったとき、学級は豊かな集団になる。

ここでは、あきらめていた修学旅行に行くことができた雅樹君を通して、今まで「したかったけれどできなかった」「言いたかったけれど言えなかった」ことをもう一度振り返り、そのことを学級の中で話し合わせたい。そうすることで、まわりの子どもたちには、みんなから取り残される寂しさや、悔しさを自分のこととして感じさせたい。

B 教材の解説

雅樹君は二年生のときには、修学旅行に行かないことになっていた。それは家族で出した結論ではあったのだが、家族の心ではなかった。

雅樹君も修学旅行へ行くのは当たり前だと考えた担任の先生は、雅樹君の家に何度も足を運び、父親や母親や雅樹君の思いを聞き取っていた。

そこで母親は次のように述べていた。

「それはもちろん、できることなら修学旅行に行かせてやりたいです。でも、これ以上、先生方に迷惑をおかけするのはとう気持ちはあります。私が一緒にいけばいいということなのですが、私がついていくと、弟の宏行（兄と同じ障害を持つ）を学校に連れて行く人がいなくなる（お父さんは車の免許を持っていないのです）ので、それで雅樹と一緒に修学旅行についていくことは無理なんです。ですから、そういう条件なら、あきらめるしかないということで、積み立てた旅行貯金は雅樹にあげて約束して雅樹にはあきらめてもらったのです。」

また、雅樹君本人も次に述べていた。

「やっぱ、本当は修学旅行へ行きたい。でも、いろんな人に迷惑をかけてまで行きたくない。」

障害を持った雅樹君は「自分は周りの級友や教師から助けて

もらうばかりの、つまり、一方的に迷惑をかけるだけの存在だ」と思い込み、それゆえ、修学旅行はあきらめざるを得なかったのである。

担任の先生は学級の仲間達に雅樹君の修学旅行のことを考えさせ、一方では学年の先生達にも働きかけていった。

雅樹君の修学旅行への参加を可能にしたのは仲間達だった。彼らは障害者用観光マップを参考に、見事に自主プランを完成させ、着替えのこと、トイレのことなどについても相談していった。彼らは「障害者の面倒を見てあげる健常者」ではなく、修学旅行をともに楽しもうとする仲間だった。

ドリームランドでゴンドラに乗った雅樹君を見て驚いた担任の先生は、「雅樹君が乗ったそうだったから乗ったのさ」と当たり前のように言う仲間に返す言葉がなかった。

修学旅行をきっかけにして雅樹君は仲間とますますつながりを深めていった。

雅樹君はその後仲間を支えられながら学校生活を送り、四月には全日制高校へ進学し、高校卒業後、専門学校へ進学をしたが、病気のため一九九六年に二十一歳で亡くなった。

C 指導上の留意点

① 学級の中に障害を持つ子がいれば、あらかじめその子の思いをしつかりと聞き取っておき、授業についての話し合いも十分しておくことが大切である。また、保護者の思いもつかんでおくと、授業に反映することができて良い。

② 障害を持つ子がいなくても、子ども同士がさらにつながりを深め、豊かな関係をつくっていくような方向で取り組んでほしい。

③ 子どもが書いた作文は、教師が読んで終わってしまうのではなく、きちんと子どもたちに返して行ってほしい。

D 参考

・石川の人権教育第4集「出会いを求めて」（一九九一年野田龍三・中村秀人編）

「雅樹君のこと」

柚木 光（金沢市立鳴和中学校：当時）

本教材を使った授業から

◆「わたしは小学校のとき、一回友達といっしょに七尾のお寺（？）にとまりに行きました。そのときは、他の学校の人がたくさんきていました。そして、そのほかの学校の人に、友達がたくさんできて、HAPPYだ！と思うていたときに、突然障害者の人たちと「交流をもつ」という話が出て、げー！と思いました。すごくいやでした。でも、その人たちの話を聞いているうちに、おもしろくて、楽しいと思いました。あとで、「げー」とか「やだなー」とか思っていたことを思い出すと、すごく自分が情けなくなりました。」（羽咋）

E 授業の展開

教師の基本発問・助言	生徒の活動・指導の要領
<p>一 導入</p> <p>① 障害を持っている人に出会ったとき、どんなことを感じましたか。</p> <p>二 展開</p> <p>② 「仲間とともに」を読みましよう。</p> <p>③ 雅樹君が修学旅行に行くのをあきらめていたのはなぜですか。</p> <p>④ 雅樹君があきらめていた修学旅行に行こうと思ったのはなぜですか。</p> <p>⑤ 修学旅行を終えて雅樹君はどんなことを思いましたか。</p> <p>三 まとめ</p> <p>⑥ 修学旅行に行きたかったけれどあきらめていた雅樹君のように「言いたかったけれど言えなかった」「したかったけれどできなかった」という経験はありませんか。</p>	<p>① そのときの感じを正直に出させる。</p> <p>② 雅樹君について補足する。 進行性筋ジストロフィー症など</p> <p>③ 「みんなに迷惑をかける」と言う気持ちがあったこと。</p> <p>④ 「先生の働きかけや級友の努力があったことをおさえる。 雅樹君と周りの級友が「面倒を見てくれる級友」ではなく、「ともに旅行を楽しもうとする仲間」という関係だったことをおさえる。 楽しかったこと、新たに学んだことをまとめる。</p> <p>⑤ 単なる金沢と京都の施設・設備の違いと捉えさせるのではなく、金沢に住む自分たちの意識を考えさせたい。</p> <p>⑥ 今までの自分について振り返り、正直に出させる。 作文に書かせてもよい。</p>